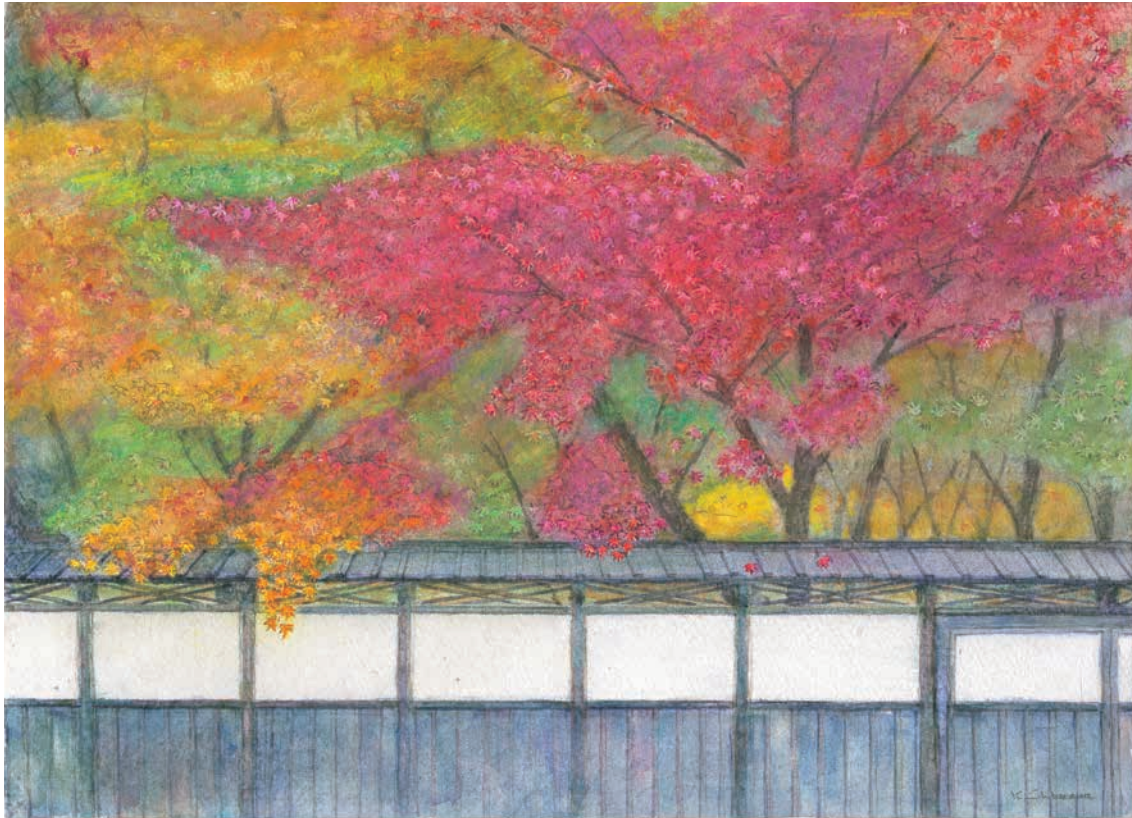


人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく



絵 柴澤 一嘉

「泉恵園」
新潟市秋葉区にある石油王の庭園です。

2023 AUTUMN

- 随 想 ②
持続可能なまちづくり
田口 太郎(徳島大学大学院教授)
- 特別企画 ④
飛驒の砂守を語り継ぐ
一世の時を経た私たちの取り組み
北陸地方整備局 神通川水系砂防事務所
- 特集「地域とともに」
あそび防災プロジェクト 防災ヒーロー入団試験
～親子で知ろう、身近で大事な防災のこと～ ⑧
NPO法人シンママ応援団
- シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」 ⑫
空き家を活かし「歩きたくなる温泉街」づくり
合同会社ミライズ(新潟県新発田市)
- 北陸再発見 ⑭
脚光浴びる加賀棒茶の、意外な真実(石川県金沢市)
- 伝言板 ⑯

持続可能なまちづくり



たぐち たろう
田口 太郎

徳島大学大学院教授

1976年神奈川県生まれ。早稲田大学理工学部建築学科、同大学院修了。博士(工学)。新潟工科大学建築学科准教授、徳島大学総合科学部准教授を経て、現職。専門はまちづくり・地域づくり。新潟工科大学在職時に、2007年新潟県中越沖地震が発生。学生とともに中心商店街の復興支援にあたる。主な著書に「中越地震から3800日」(ぎょうせい,2014)、「地域おこし協力隊 10年の挑戦」(農文協,2019)、「少人数で生き抜く地域をつくる」(学芸出版社,2023)など。

研究者としての独立の地、新潟・中越

筆者は2006年10月から2011年9月までの5年間、新潟県柏崎市にある新潟工科大学に在籍していた。研究者として初めて自分の研究室を構え、研究をスタートしたのがこの柏崎にある、小さくも良い大学であった。しかし着任して早々の2007年7月に中越沖地震が発生、以降は柏崎市の中心商店街「えんま通り商店街」の復興支援を中心に行い、加えて2004年の発災から3年が経過した中越大震災の被災地で始まった「地域復興支援員」の後方支援などを行ってきた。

現在は徳島大学に所属しつつも、徳島県内の農村に移住し、住民としての視点も持ちながらまちづくりの研究を進めている。



えんま通り商店街で開かれた「笑福市」

「持続性」とはなにか？

まちづくりの分野では久しく「持続的まちづくり」が叫ばれ、今やSDGsでも「持続的開

発目標」としてさまざまな事柄に注目が集まっている。まちづくりの持続性について、現場の視点で筆者が強く感じるのは人材の持続性である。「まちづくりは人づくり」とよく言われるように、人材育成はまちづくりの肝である一方で、非常に難しいテーマでもある。

筆者自身も30年近くまちづくりと関わってきた中で、かつて「カリスマ」と呼ばれたスターがいた地域でも必ずしも持続的にまちづくりが続かない現実を見てきた。カリスマ的リーダーの存在が、リーダーへの依存体質を育み、後継者が育たなくなってしまう問題である。結果としてリーダーの高齢化とともに地域全体の活力が低下してしまうのだ。故に、まちづくりにおいて「人材の持続性」をいかに図るか、が活動全体の持続化を図る上で極めて重要であり、そのためには活動を通じて後継者となる若手がどう育っていくか、ということがポイントである。

若手が多く活躍した中越／中越沖地震の復興まちづくり

人材の有無はまちづくりの成否を分ける重要な点であるが、筆者が経験した新潟県中越地域でのまちづくりはこの人材に特に恵まれていた。というのも、筆者が新潟工科大学に赴任した当時(2006年)、新潟では中越地震で被災した中山間地域の集落で仮設住宅からの帰村が進みつつも、被災前と比較して大幅な人口減少が

明らかになりつつあった。こうした中、復興に取り組む集落を継続的にサポートしていた人材が20代、30代などの若手であった。更に彼らを導く立場であった長岡造形大学や長岡技術科学大学の専門家もまた30代、40代と研究者の中では若手であった。こうした若手の研究者やサポーターと集落の人びとの協働による復興活動は、それぞれが持つポテンシャルを最大限活かし、非常に効果的であった。



えんま通り商店街での復興ビジョンづくりの様子

特に2008年に「地域創造プラン」の柱として提唱された「地域復興支援員」の取組は、今や我が国の過疎地域対策の切り札となっている「地域おこし協力隊」の前身ともなり、更に東日本大震災被災地の「復興支援員」のモデルともなった。当時の復興の現場を共有した若手たちは今もそれぞれの地域で地域支援活動を行っているが、驚くことに、彼らと久しぶりに顔を合わせ、活動を紹介しあってもまったくブレがなく、中越で議論していた復興まちづくりの肝を大切にしながら、地に足つけた取組を展開している。昨今のまちづくりはメディアによる注目や、SNSの普及もあり、“見栄え”を気にしたり、地域での起業をめざすなど、地域の下支えとはすこし異なった取組に注目が集まる中で、中越での復興まちづくりを支援した仲間たちは未だに、こうした“流行りの”まちづくりに惑わされずに着実に地域目線で活動している。

筆者自身もさまざまな外的な動きがある中で、いかに地域の内発的な力を育むかを大切にしているが、当時の仲間たちの活動を見聞きするたびに、背筋がずっと伸びる緊張感を感じている。

■ 支援者が地域を引き継ぐ

新潟での筆者の活動の中心は2007年新潟県中越沖地震で被災した「えんま通り商店街」であった。日本中の中心市街地と同様に、えんま通り商店街も厳しい状況にあった中で、中越沖地震が発生、大きな被害が出た。しかし市民主体の復興活動は地域の活力を生み出し、被災以降は商店街の空き店舗率ゼロが続いている。一方、同時に商店街の高齢化も進み、商店街という組織の存続が厳しくなり、解散することになってしまった。一般的に商店街組織の解散は商店街という体裁の崩壊を意味するが、えんま通り商店街では商店街有志や支援者らの共同出資で被災後に設立されたまちづくり会社がグッズ販売やイベントの企画運営など、これまで商店街組織が担ってきた機能を引き継いだのだ。そしてこの新しい組織を中心に回している人材は、復興支援を行っていた私の研究室の卒業生であり、復興過程で復興支援に加わった地元建築家である。

災害というのは地域の脆弱性を顕在化する機会となるが、一方で地域の人的ポテンシャルが最大限引き出される機会ともなりうる、ということだ。新潟県中越地域が経験した中越地震、中越沖地震という2つの災害はさまざまな人材のポテンシャルをも顕在化させる大きな機会となった。「ピンチをチャンスに」とはいうが、この人材が活躍しやすい場があった、という新潟の土壌はきっと将来も有効に活かされるだろう、と期待している。



飛驒の砂守を語り継ぐ

一世紀の時を経た私たちの取り組み

北陸地方整備局 神通川水系砂防事務所

1. はじめに

大正8年7月、内務省新潟土木出張所坂下砂防工場が岐阜県吉城郡坂下村（現飛驒市宮川村）に設置され神通川水系宮川流域で砂防工事に着手してから約一世紀の歳月が経ちました。この長い歴史の中で先人たちが残してきた偉業を未来に引き継ぐとともに、山間地で人知れず土砂災害から地域を守っている「砂防」を少しでも多くの方々に知って欲しいという思いから、私たち神通川水系砂防事務所が取り組んでいる一部を紹介します。

2. 神通川水系直轄砂防事業の振り返り

直轄着手当初の宮川流域に着手後、高原川流域六郎谷（現飛驒市神岡町）に事業着手しています。

事業実施により安全度が向上したこれらの流域は順次岐阜県に引き継ぐとともに、地域の発展と土砂災害の実態とともに新たな流域に事業展開を移行しながら、現在は平湯川・蒲田川・跡津川を中心に事業を実施しています。



直轄初期に着工した六郎谷第1号砂防堰堤（大正10年頃撮影）。後に国の登録有形文化財に登録【写真出典】神岡町史写真編

一世紀の間、施工体制としては直営施工から請負施工、計画・設計では石積堰堤からコンクリート堰堤となり、近年では現地材の巨石を活

用し自然環境に配慮した施設整備、流木被害を防止するための施設整備、長寿命化対策、生産性向上のための“チャレンジ砂防”など、社会の変化とともに新たな取り組みにもチャレンジしながら変化してきました。

日本の背骨と呼ばれる飛驒山脈と活火山焼岳を背後に抱えたきわめて厳しい自然条件の中で、度重なる災害と闘いながらも地域の安全と暮らしを守るための砂防事業は、奥飛驒の地で培われた知恵と技術の粋とともに、先人から後進へと着実に引き継がれています。

そして、人力による工事からの長い歴史の中で砂防に従事してきた人々を「守る」という言葉をあて敬意を表し「砂守」と呼び、語り継いでいます。



日影第一号砂防堰堤（昭和27年竣工）戦後の代表施設。当時日本有数の規模を誇る。後に国の登録有形文化財に登録



砂防事業に従事した地域住民（昭和30年代）



「飛驒の砂守」の墨書
 揮毫者: 茂住青邨(茂住修身)氏
 飛驒市古川町出身の書家
 内閣府職員(辞令専門職)として
 新元号「令和」を揮毫

3. 砂防と観光振興のマッチング「砂守ツアー」

神通川水系砂防事業を実施している地域は、全国的にも有名な温泉郷である奥飛驒温泉郷地域(高山市)や廃線鉄道を利用したレールマウンテンバイク『Gattan GO!!』で地域活性化を図る飛驒市神岡町など、観光業の盛んな地域です。これらの観光振興と砂防をうまくマッチングさせ、「砂守ツアー」として平成30年度から取り組みを継続しています。“普段見ることのできない砂守の偉業を巡る”をテーマに、定番となった「砂守ジオコース」「砂守ノーベルコース」に加え、令和5年度は新たに「奥飛驒 SABOめぐり」を試行し、多くの方々に砂防と地域を楽しむながら学んでいただいています。

行政(国・県・市)に加え、観光や地域振興に取り組む地元のNPOや民間企業など、関係する皆さんとの協働により手づくり感いっぱいのツアーとなっています。

概要は以下のとおりですのでご興味のある方はぜひ参加してみてください。コストパフォーマンス的にもお勧めの満足できるツアーを用意しています。

1) 「飛驒の砂守ツアー」コンセプト

- ① 一世紀にわたる砂防技術の変遷・変わらぬ砂防従事者(砂守)の志など、安全・安心・発展を支え続ける砂防施設、土砂災害との闘いの歴史(飛驒の砂守)の伝承
- ② 大自然の恵み、土砂災害等の自然の猛威など間近で見て・触れて・感じられるダイナミズムを体感

- ③ 奥飛驒ならではの人情・文化(トンちゃん・鶏ちゃん・めでた・わかまつ様等)をアピール
- ④ 地域と地域、人と人とを結びつけ(輪・和・循環)、付加可能な様々なオプション(砂防ダムカード、全国初となる砂防ダムカレーや全国有数のアクティビティ『Gattan GO!!』乗車など奥飛驒ならではの魅力)を活用し、持続的なインフラツーリズム(観光振興と防災意識啓発)の仕組みを構築

2) 3つのコースの概要

定番の2つのコースは例年秋頃に実施していますので、奥飛驒の美しい錦の紅葉も楽しめます。

過年度実施の参加者アンケートの分析により「砂防」に特化したツアー化についての根強い要望があったため、令和5年度は試行的に「奥飛驒 SABOめぐり」と称したツアーを追加しました。夏の終わりの8月末に実施し予想を上回る全国からの申し込みとなりました。



コース名	砂守ノーベルコース	砂守ジオコース	奥飛驒 SABOめぐり
アピールポイント	知られる登録有形文化財やノーベル賞受賞の原動力を探る	焼岳火山群誕生の軌跡と噴火の足あとを巡る	奥飛驒の砂守の功績を辿るー専門の案内人が詳しく解説!ー
みどころ	<ul style="list-style-type: none"> ・六郎谷砂防堰堤 ・Gattan GO!! ・高原郷土館 ・砂防ダムカレー ・ひだ宇宙科学館 ・カミオカラボ など	<ul style="list-style-type: none"> ・白谷砂防堰堤 ・地獄平砂防堰堤 ・しのぶ砂防堰堤 ・砂防ダムカレー ・新穂高ロープウェイ ・山頂展望 など	<ul style="list-style-type: none"> ・地獄平砂防堰堤 ・しのぶ砂防堰堤 ・日影第1号砂防堰堤 などの様々なタイプの砂防堰堤

3) 取組の効果・成果～アンケート結果より～

参加された方々から頂いた貴重な意見から継続性は高いと判断しています。引き続き飛驒の砂守を語り継ぎ皆さんに砂防をご理解いただけるよう工夫しながら継続していきたいと考えています。

(以下、これまでの回答より一部抜粋)

- ・ 専門の方の解説（国交省・ジオ協議会）があり、理解が深まってとても良かった
- ・ 砂防堰堤をつくる目的がよくわかり、災害が多くなった現在、とても必要だと感じた
- ・ 砂防という趣旨を大切にしたい良いツアーだと思いました
- ・ 砂防堰堤をもっと間近に見たい 等々



最新の砂防施設見学（地獄平砂防堰堤）



土砂発生源と砂防施設見学（白谷砂防堰堤群）



国指定文化財地域での景観配慮砂防施設見学（島田洞砂防堰堤）



レールマウンテンバイク Gattan Go!!

4) ちょっと一服“砂防ダムカレー”

砂守ツアーの昼食ではツアー特製“砂防ダムカレー”を楽しむことができます。巷で流行のダムカレーとはひと味違う、砂防堰堤のしくみを学びながら食することができる全国初のカレーとなっています。砂守ツアー限定のプレミアムカレーです、ぜひお試しあれ。

砂防ダムカレーの召し上がり方

解説

- ・ カップで砂防ダムを仕上げました。
- ・ ご飯の中央部に溝を作り、川を再現しました。
- ・ ラーラーは土石流をイメージしています。
- ・ ジャガイモで川の流れを表現しました。
- ・ フロッキーで樹木を表現しました。
- ・ ニンジンで紅葉の色合いを表現しました。
- ・ 季節の味覚さのこも添えました。

写真裏 砂防ダムカレー

召し上がり方

- ① ご飯とカップに入ったお肉の下に食用スプーンを敷き、卵を割ります。
※ カップを上げ、ライス側へラーラーが流れようスプーンを敷いてください。
- ② マグカップの土石流に見立てたカレーをカップ側のお肉の端からゆっくり流し込みます。
砂防ダム(カップ)から川(ごはん)に流れるカレー(土石流)の様子をお楽しみ下さい。

さあ、召し上がり!

ノーベルコースで提供している
“砂防ダムカレーの召し上がり方”

4. ちょっとマニア向け“ SABOカード ”

砂防を手軽に学習できるカードとして多くの砂防ファンの中で収集されているのがSABOカードです。神通川水系の砂防堰堤についても、全国でもめずらしい形で特にお勧めの堰堤を選定し、これまで8枚のSABOカードを発行しています。砂守ツアーに参加された方など、当地の堰堤を訪問し学んでいただいた方々限定で入手可能となっています。



SABOカードの一部
(奥飛驒ならではの様々なタイプの砂防堰堤を選定し作成)

砂守ツアーのアンケートでは「参加理由：砂防カードを配布しているから」「意見：砂防カードを更に増やしていただきたい」など、SABOカードファンからの回答もありツアー参加へのSABOカードの相乗効果が伺えます。

5. 地域との信頼関係と強い繋がり

神通川水系砂防には、他には無い地域との信頼関係や強い繋がり感という強みがあります。

その1つが「NPO神通砂防」という旧上宝村かみたからむらの村民全員参加により設立された応援団です。平成の大合併により旧上宝村が高山市となった中で、地域の皆さんの「砂防なくしてこの地域の存在はありえない」との思いから、災害や砂防事業に関する歴史的な背景を伝承し、防災意識の向上や砂防を生かした地域づくりを、地域が主体となって取り組むことを目的に平成16年に設立されたものです。

小学生への防災教育を始め、「奥飛驒さぼう塾」(神通砂防資料館・昭和58年開館)では、来訪された方々に過去の災害や一世紀におよぶ飛驒の砂守を語り継ぐ役割を担っています。ご興味のある方はぜひ足を運んでみてください。



NPO神通砂防による活火山焼岳での小学生への防災教育



奥飛驒さぼう塾館内で解説するNPO神通砂防の会員



奥飛驒さぼう塾

【開館】5月～11月

【所在】高山市奥飛驒温泉郷中尾2-34

6. むすびに

大正8年に直轄事業に着手以来、昭和、平成の時を経て令和という新しい年号の元年に、神通川水系砂防直轄事業着手から100年の節目を迎えました。

この間、幾度の土砂災害に見舞われながらも立ち止まることなく事業を継続された諸先輩方の努力と英知が地域の安全・安心に繋がっています。一方で、近年の異常気象に伴い全国で大規模な土砂災害の発生が絶えません。神通川水系においても甚大ではないものの災害はおきており、引き続き災害に備える歩みを続けなければなりません。

飛驒の砂守のこれまでの足跡を後世に語り継ぎ、今後も神通川流域の地域の方々とともに砂防事業を継続し地域の発展に繋がるよう、精一杯取り組んでいきます。

多くの諸先輩方、関係者の皆様にこの誌面をお借りし深く感謝の意を表します。

〈参考文献〉

- ・建設省北陸地方建設局神通川水系砂防工事事務所：奥飛驒の砂防 八十年に学ぶ 平成12年12月
- ・国土交通省北陸地方整備局神通川水系砂防事務所：飛驒の砂守 百年史 令和4年3月

問い合わせ先

神通川水系砂防事務所

<https://www.hrr.mlit.go.jp/jintsu/>



おこじん

神通川水系砂防事務所
公式キャラクター
「おこじん」+「じんづうさぼう」
が由来です。



特集「地域とともに」

(一社)北陸地域づくり協会は、公益事業として、「北陸地域の活性化に関する研究助成事業」制度を平成7年に創設し、地域活性化に成果が期待できる事業を募集・採択し支援しています。今回は、第27回(令和4年度)助成事業のなかから「石川シングルマザーの会」の活動を紹介します。

あそび防災プロジェクト 防災ヒーロー入団試験 ～親子で知ろう、身近で大事な防災のこと～

NPO法人シンママ応援団(旧石川シングルマザーの会)

1. はじめに

1-1. 地域の課題と必要性について

石川県では2020年12月頃から地震が多発しており、中規模以上(震度5弱以上)の地震も増えている。その回数は47都道府県のうち10位に入るほどである。

2022年6月には石川県の能登地方(珠洲市)で最大震度6弱の地震が発生した。

金沢市では大きな被害は少ないが、それによって防災への備えという意識が低いのが現状である。

災害現場では乳幼児・小さな子どもを連れての避難など細かいところにも配慮が必要であるが、その声を上げられないこと、災害現場や避難所における女性のニーズについて配慮されないといった課題があがっている。(参考:「災害対応力を強化する女性の視点」令和2年5月/内閣府男女共同参画局)

災害が実際に起こった時には自分で生き残るための知恵=自助、他人を助ける知識、地域や身近にいる同士が互いに助け合う共助が大切でありながら、そのための知識を得る機会が現状では避難訓練程度しかなく、コロナ禍での催し物中止も相次ぎ、子どもたちが防災について学ぶ機会が少ないことも課題である。

特に、ひとり親家庭については、大規模災害が起きた時に、ふたり親家庭よりも子どもが一人きりになってしまうリスクが非常に高い。そのため、万が一の災害時に子どもたちが生き延びられるよう、防災に対する心構えや知識を身につけさせたいと考えるひとり親の声も当会へ届いている。

1-2. 本事業の経緯について

当会は、金沢市と協働で取り組むまちづくり企画を公募する「協働のまちづくりチャレンジ事業」に、令和3・4年度の2年連続で採択され、北陸地域づくり協会の研究助成事業とあわせて防災教育をテーマに事業を行っている。

この事業では金沢市危機管理課や「かなざわコミュニティ防災士ネットワーク」と連携し、「シングルマザー×防災」をテーマとして、実践形式での防災知識の取得や石川県内のハザードマップの見方、自分たちの居住地域について考える機会を設け、自助=自分の身は自分で守るということを学ぶ機会とした。

自助について理解を深めた上で、次に必要な「共助」についての啓発も必要だと考えた。総務省消防庁の「自主防災組織の手引」のなかにも課題の一つに「地域社会とのつながり、結びつきの希薄化」が指摘されている。そこで、金沢市と防災士に協力を仰ぎ、地域住民の交流と防災教育を掛け合わせた本事業の計画を進めた。

金沢市はその個性や魅力を活かして国内外から人・モノ・情報を集め、その交流を通じて新たな価値の創造と持続的な発展を続ける「交流拠点都市」を目指している。そのために金沢市は市民との協働で金沢の“まちのちから”をさらに高めるために、「金沢かがやき発信講座」という金沢市の職員が直接訪問し、金沢の街の魅力や市民の皆様とともに進めていくまちづくり事業を行っている。

今回のイベントもこの講座を活用し、金沢市と共に創り上げた。

1-3. 本事業の目的

女性が積極的に防災に関わっていける場を、私達ひとり親支援団体が企画・提供することで、社会的に支えられる側から発信者となって地域社会、人との繋がりを構築し、女性目線の防災を深堀していく。

「もしも災害が起こったらどのような行動をとるのか」「石川県で災害が起こったらどのくらいの規模になるのか」等、大人も子どもも防災について身近に考える機会となるように、親子でコミュニケーションを取りながら、自分で助かる、他人を助ける知恵や経験を得る場を作る。

1-4. 事業概要

株式会社 IKUSA が提供する「あそび防災プロジェクト／防災ヒーロー入団試験」を取り入れ、子どもを中心に「もしも災害が起こったら」をテーマに身体と頭を使って体験できるイベントを行う。

【実施場所】大桑防災拠点広場

【実施時期】2022年9月11日(日)10:00～15:00

【見込み参加者数】30組 80名程

【イベント内容詳細】各種目をクリアしてスタンプラリーを行う。全ブースを周り、すべてのスタンプをGETした子どもたちには防災メダルと防災ヒーロー認定証が進呈される

■各ブース

- 防災ウォークラリー ●スモーキー迷路
- 防災クイズラリー ●地震体験車
- 水消火器体験 ●AED、心肺蘇生体験
- ベジチェック

2. 本事業の成果

防災ウォークラリー、スモーキー迷路、防災クイズラリーの他に、金沢市消防局の協力による地震体験車、水消火器体験、日本赤十字社石川県支部の協力によりAEDを用いた心肺蘇生体験、明治安田生命保険相互会社による手のひらを使って野菜摂取量を調べるベジチェック全7種類のブースを設置した。

告知はチラシ、石川シングルマザーの会ホームページ、SNSを使用し、事前応募では、50組の応募があった。

当日は、事前予約の他、本会場が公園に隣接しているため、公園に遊びにきた親子の当日参加も受け入れ、親子連れなどファミリー層を中心に62組述べ201名の参加となった。

金沢市危機管理課が管理している当日の会場である「大桑防災拠点広場」は、防災士の研修などで使用されており、団体としての使用登録、使用許可をいただいて借りることとなったが、今回のような一般客を対象とした催し物の開催を行う目的としては初めての貸し出しであった。

事前準備では参加者の来場時間を分散し、1時間ですべてのブースを回れるような配置を考え、駐車場や受付スタッフ、各ブース担当スタッフを配置し前日までオンラインでのミーティング、当日もミーティングを行い、大きなトラブルなども一切なく時間通りにイベントを撤収することができた。

■当日の様子



大桑防災拠点広場



受付の様子

メインコンテンツ「防災ヒーロー入団試験」では、スタンプラリー形式で親子で防災を学ぶ。受付でスタンプラリーのカードを受け取り、まずは「スモーキー迷路」へ。水蒸気による疑似煙で、火災時に煙の中で避難する体験をして、1つ目のスタンプをもらう。



最後は「防災クイズラリー」。会場のあちこちに貼られているキーワードを見つけ、LINEを使いながらクイズに答えると、3つ目のスタンプがもらえる。



スタンプを3つ集めると「防災ヒーロー認定証」が完成し、ヒーローバッジが進呈された。

次は「防災リュック間違い探し」で、机の上に並べられたアイテムのなかから、40秒以内に避難所へ持っていくものを10個選んでリュックの中に詰める。

一つ一つ確認しながら答え合わせをすると2つ目のスタンプがもらえる。



日本赤十字社石川県支部による心肺蘇生法の実習体験ブースでは人体模型を用いて実践体験を行った。



地震体験車ブースでは、震度7までの地震を体験することができる。



消防士から水消火器で消火器の使い方を教わり、実際に障害物に向けて噴射し、実践さながらの体験も。



明治安田生命保険相互会社からはイベントへの協賛と、機械に手のひらを乗せるだけでどれだけ野菜が振れているかを測れるという「ベジチェック」ブースにて出展協力を得た。

予想を超える参加者数だったものの、ブースを増やしたことや広い場所を借りられたことで分散することができ、待ち時間も少なく、多くの親子に体験を提供することができた。



3. 今後の展望

シングルマザーが自分の選択に誇りを持ち、自分らしく生きることで、子どもたちにも「自分で道を切り開く力」を備えてほしいというのが私たちの活動の中心となっている。

これまで、任意団体の石川シングルマザーの会として、金沢市や自衛隊、防災士の皆様と協働し防災イベントを開催し、ひとり親支援として食料配布や運動教室、情報交換や交流会など様々な活動をしてきた。

地域の団体や企業と協力しながら活動を続けてきた結果、当事者だけの団体ではなくなってきたため、2023年4月からは「NPO法人 シンママ応援団」として、さらに活動の幅を広げ、体験格差解消事業としての自然体験活動に力を入れていきたいと考えている。また、経済格差解消事業としてのITスキルアップ研修等も事業として進め始めている。

「母と子の第一歩を支える、日本一元気な応援団」として私たちは今後も地域の皆さまと共に活動を続けていきたい。

問い合わせ先



NPO法人シンママ応援団

sinmama.ippo@gmail.com
https://ks-mama.com/



11 住み続けられるまちづくりを



シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

空き家を活かし「歩きたくなる温泉街」づくり | 合同会社ミライズ

開湯 100 周年に会社を設立

月岡温泉（新潟県新発田市）は、14の温泉旅館が立ち並び新潟県内有数の集客を誇る温泉地。硫黄分の多い良質な泉質は「美肌の湯」として知られ、2014年に開湯100周年を迎えた。

このとき、次世代の旅館経営者らが「100周年イベントだけで終わらない何かをしよう」と話し合ったことが、合同会社ミライズ設立の契機となった。

当時の月岡温泉が抱えていた課題は、各旅館が設備を充実させ宿泊客を抱え込んだことで、温泉街としての魅力が減退し、空き店舗も増えていたこと。それ以前から「歩きたい温泉街」を目指して足湯や源泉の公園整備などを行ってきただけが目に見えるような成果はなく「メインストリート沿いも空き店舗が多くて、歩いている人はほとんどいなかった」と穴澤恵子代表は言う。団体旅行から個人客の割合が年々増加する中、SNSが集客力になりつつあり、「ぼえ」る魅力的なスポットを持っているか否かが発信力を左右するようになってきていた。



ミライズ代表で「泉慶」若女将の穴澤恵子さん

そこで30～40代の同世代旅館後継者9人は、温泉街の空き店舗を活用し、若い人を楽しみながら新潟の魅力を伝えられる店をつくらうと決めた。その母体としては、各種助成金も得られる新発田市観光協会や月岡温泉旅館組合にすることも検討したが、コンセンサスを得ていくために時間と労力を費やすよりも店づくりに費やそうと自己資金を出し合い、ミライズを設立した。

こうして2014年にオープンした「新潟地酒 premium SAKE 蔵KURA」は、チケット購入で新潟銘酒の利き酒ができる、酒に特化した土産物店。当初は「とにかく一つでもいいから楽しいお店を作ろう」との思いだったが、同店が予想を超える集客力を発揮。メンバーの会合で「利益も出たからこれをもとに来年もできるね」となり、2015年に海産物や発酵食品に特化した「新潟地物 premium SELECTION 旨UMAMI」

をオープンさせた。ここでは数ある味噌から自分好みの味噌汁を作ったり、旨みの効いたおかずを試食できる。初年に作ったKURA同様、滞留時間を伸ばして賑わいを生み出す仕組みの店舗だ。



最初にオープンさせた「新潟地酒 premium SAKE 蔵KURA」。100種類の地酒から選んで試飲できる店。県外からの若いお客さんが多く、地元の酒販店とは売れ筋が異なるようだ

1年に1店舗オープンさせる

同社は1年で1店舗ずつオープンすることをミッションとしているが、これを明確にしたのは3年目からだ。その後「4年目くらいからは目に見えて通りを歩くお客さんが増えた。今は日によっては自動車の通行が難しいほどになった」と穴澤さんは言う。



温泉街から共同浴場へ向かう道の角に建つ、「新潟ショコラ premium SWEET 甘AMAMI」。県内のショコラショップの品々を集め、チョコレートフォンデュが楽しめる

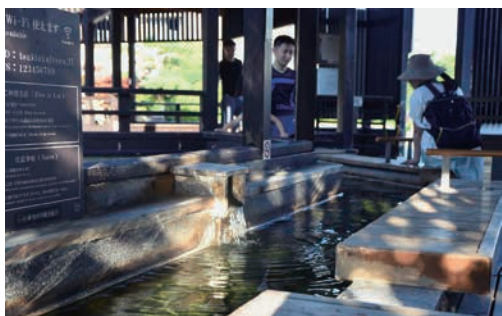
空き店舗を活用し、カラーを明確にした小さな店舗を次々と出店させることで温泉街の回遊性を高めた。出店を1年1店舗に絞ることで無理をせず継続的な取り組みにしていたことは、歩いて楽しい温泉街づくりに成果を上げただけでなく、経営者同士の意思疎通を向上させた。さらに、温泉街を歩く観光客が増えたことで既存の土産物店の理解を獲得、また、外部資本による新規出店を得ることにもつながるなど、さまざまな好循環を生み出した。



月岡温泉のメインストリート。酷暑の中でもお店を渡り歩くお客さんで賑わう

こうした効果は、当初から目指していたわけではなく、外部コンサルタントを招くこともしていない。「メンバーはボランティアで、私も一切ここから収入を得ていません。最初の自己資金だけで借金をせずにやろうと小さな店舗になって、出た利益を次の出店に回しながら

続けてきた。店の内容もメンバーが集まってお酒を飲みながら『こんなのはどう?』と好きなことを言い合い、考えながらやってきました」と話す。代表の穴澤さん以外は全員男性で、この9年の間に全員後継者から社長となった。「旅館の経営者同士だと、普段仲良くしたところでやはりライバル。ミライズを経営することで共通の目的に向かえたことが、いろいろなところでプラスに働いています」と穴澤さん。メンバー全員が旅館組合の組合員でもあり、取り組みが旅館組合の活性化にも結びついている。



日帰り、立ち寄り客にも人気の足湯。源泉に近いので硫黄のにおいが漂う。隣には外部資本による月岡ブルワリーが出店し、クラフトビールも楽しめる

■ 月岡温泉のこれから

今年の冬には10店舗目の出店を控えており、現在準備中。例年春にオープンさせてきたが、数年前から適当なサイズの空き店舗がなくなり、地権者と交渉して空き地にプレハブで出店する年もあるなど、用地確保に時間が掛かるようになってきている。しかし1年で1店舗のミッションに関しては、「今はメインストリートに集中的に出していますが、外れの方や裏通りもある。お客さんの回遊性が高まれば、いま手つかずのところへも出店できる」と、これからも続けていくと穴澤さんは言う。



行灯のライトアップが池の水に映える月明かりの庭は、夕食後の散歩コース。温泉街では夜のアクティビティも充実しつつある

観光地では外国人客向けに“日本風”のさまざまなグッズを集めた土産物店が人気だが「月岡は、一部の大規模ホテルを除けば新潟市域からのお客さんが大部分を占めていて、現状では外国人向け土産物店を出しても採算が採れる見込みが薄いです。ですが、外国人向けの土産物店が必要になるよう、インバウンドにも力を入れていきたい」と話す。

新型コロナウイルスの流行で一時観光需要は激減したが、この間の手厚い助成もあって月岡温泉では多くの旅館が設備を更新してコロナ明けに備えてきた。穴澤さんは団体客の割合の高いホテル泉慶の若女将だが「コロナ禍では個人客の比率が8割まで上昇。それでもなんとかやっていけるんだという自信になりました」と、決して悪いことばかりではなかったとコロナ禍を振り返る。

「月岡温泉の認知度は、関東ではそこそこあっても、関西となるとまだこれから」と話す穴澤さんが、現在期待を寄せているのが佐渡金山の世界遺産登録だ。月岡温泉は従来から佐渡観光ツアーで行き帰りの宿泊地になることが多かった。妙高温泉や湯沢温泉など、外国人に人気のスキー場を至近に持たない月岡温泉にとっては、世界遺産はインバウンドの起爆剤となり得る。その時のためにも同社の「歩きたくなる温泉街」づくりは欠かせない。

取材・文 橋本啓子

問い合わせ先

合同会社ミライズ

新潟県新発田市月岡温泉453番地(「泉慶」内)
TEL: 0254-32-1111

▶ 月岡温泉の
詳細はこちら



脚光浴びる加賀棒茶の、意外な真実

近年ほうじ茶がスイーツ素材として注目を集めていたなか、大手カフェチェーンが加賀棒茶を使用した商品を発売。加賀棒茶が全国で知られたことで、観光客にも人気を集めるようになった。石川県伝統のお茶の歴史とこれからを聞いた。

■ 茶の茎利用は窮余の策

加賀百万石のお膝元は茶の湯が盛んで、茶葉生産地の京都宇治と繋がりが深く、石川県内各地でもかつてはたくさんの茶畑があったという。明治以降海外貿易が始まると、茶葉が重要な輸出品目となり、石川県の産地からもどんどん輸出されていった。困ったのは地元の製茶販売店（茶店）である。「輸出にとられて売るのがなくなってしまったんです。これでは茶店はみんな廃業せざるを得ない。それで、これまで捨てられていた茶の茎をお茶にできないかと考えた」と石川県茶商工業協同組合事務局のこぼやしかずしげ小林一茂さんは言う。元祖には諸説あるが、林屋新兵衛が明治35年頃に茎の活用を研究し、焙じて販売を開始したと『加賀茶業の流れ』（米沢喜六著）にある。



茶葉を摘んだあとと捨てられる茎の部分を焙煎した加賀棒茶

「林屋は当時、今で言えば石川県を代表する企業。林屋はこれを独占するのではなく他の茶店と力を合わせ、棒ほうじ茶（茎を焙煎したもの）を「庶民のお茶」として大々的に広めた。

そもそも日本の「茶」は、茶葉を蒸して発酵を止め、新鮮な茶葉の香りと味を喫するもので、加熱して焙煎香をつけたほうじ茶は別種。石川県内の茶店は、ほうじ茶を茶とみなさず明治半ばまで扱ってこなかった。文化的にも経済的にも上位にあった茶店が「庶民」を対象にした棒ほうじ茶を取り扱いはじめたことは、社会変化の波と相まって大きなインパクトだったに違いない。

一般的に、夏場に飲む冷茶や水筒に入れるお茶には麦茶を用いることが多いが、「金沢は麦茶じゃなくて棒ほうじ茶ですよ。麦茶はそもそも“茶”ではないですしね」と小林さん。研究の末生まれた棒ほうじ茶は、茶葉が入手できなくなった危機を乗り越えただけでなく、郷土に新たな食文化を定着させた。



石川県茶商工業協同組合の小林一茂さん（小林屋茶舗代表）。金沢では茶の湯文化が重要視され、その担い手である茶店の主人は文化的にも経済的にも地域有数の立場にあって「江戸時代から続いている店もあって、政治家になった人もいる」と話す

■ 庶民のお茶が生まれ変わる

棒ほうじ茶は国内各地の二番茶、三番茶の茎や輸入品なども使って、できるだけ安い原材料で製造する薄利多売商品だったが、1983(昭和58)年に大きな出来事が起きる。全国植樹祭で天皇を迎えるホテルから「最高のほうじ茶を納めてほしい」と依頼が入ったのだ。昭和天皇は、ほうじ茶を愛飲していた。これを受けた丸八製茶場は、各地から一番摘みの良質な茎を取り寄せて、焙煎方法の研究を重ねた末に納品。これが気に入られてお持ち帰りとなり、庶民の味だった棒ほうじ茶が付加価値の高い加賀棒茶へと生まれ変わるきっかけになった。「普段飲み安いものも相変わらず作られていて、一方で材料を厳選したものもあって、だから今の“加賀棒茶”は恐ろしく価格帯の広い商品なんです」と小林さんは言う。



急須で淹れた加賀棒茶。冷茶で飲む場合はやかんでお湯を沸かして火を止めてから茶葉を入れる。加賀棒茶は定義が広いので味や香りは使う原料にもよるが、柔らかな焙煎香とともにほんのり茶の甘みがしてまろやかな味わい

■ 加賀棒茶のこれから

「加賀棒茶」は現在、石川県茶商工業協同組合が地域団体商標を取得して管理している。定義は「石川県内で焙煎された国産の茎茶」で、価格帯が幅広いだけでなく、原材料や焙煎の方法や深さなどでそれぞれの茶店が個性を出し、懐の深い商品となっている。地元でもこれを使用した菓子や飲料などが増えており、現在は

家庭用の茶葉だけでなく加工用パウダーの出荷も大きくなっている。わかりやすくするため「加賀棒ほうじ茶」などと称することもあるが、同じ加賀棒茶だ。

地元を超えて名が知られ、人気を集めている一方で悩ましいのは原材料の茶の茎が入手困難になってきたことだ。「他の茶産地が棒ほうじ茶を作り始めているんです。なにせ茎とホットプレートがあれば作れちゃうから」と小林さんはホットプレートで茎を煎って見せる。茎茶もほうじ茶も昔からあるもので参入を阻むことはできない。

小林さんはまもなく店の前に独自の焙煎施設を建設する。「ここは高齢化が進んだ住宅街だけど、犀川のほとりに位置し、最近では観光のお客さんも流れてくる。焙煎の香りが漂ったら、地域の人にも観光で訪れる人にも良いんじゃないかと思って」と話す。

組合では商標管理をする傍ら、茶葉ではなく飲料としても商品開発中。さらに加入26社それぞれが加賀棒茶で独自の展開をしている。小林さんは、庶民の味から皇室献上茶までの幅広さと懐の深さを活かして各店が工夫を凝らし、結果的に金沢の茶道文化の入り口になれば良いと考えている。加賀棒茶は、明治時代に茶道文化の担い手である茶店を廃業から救った救世主として登場したが、茶店店主にとっては茶の湯を知らない世代に広く受け入れられた現在でも、金沢茶道文化の継続、継承に貢献してくれる商品であることに変わりはない。

取材・文 橋本啓子

問い合わせ先

石川県茶商工業協同組合
【事務局】小林屋茶舗
石川県金沢市幸町 30-1
TEL : 076-231-4919




▶加賀棒茶の詳細はこちら



伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が主催、共催、後援等で行う一般参加型事業です。
お時間を見つけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期 日	開催地・会場	内 容	問合せ先
第33回 土木フェスティバル [申込不要・ 入園無料・駐車料有料]	10月8日(日) 9:30~16:30	長岡市 国営越後丘陵公園	建設機械の試乗体験、地震体験、 降雨体験、土木事業のパネル展示、 模型展示 等	信濃川河川事務所 流域治水課 TEL:0258-32-3243
2023あいづ新米 ウォーク [要申込・有料] [定員]1,000人 定員になり次第締切	10月21日(土) 受付8:00~8:40	道の駅あいづ 湯川・会津坂下 多目的自由広場	実りの秋を迎えた会津路を歩く ①6kmコース(田園地帯を通り、 勝常寺を巡るコース) ②13kmコース(阿賀川の堤防を 通り、神指城跡を巡るコース)	福島民友新聞社 営業局事業部 TEL:024-523-1334 (平日9:30~17:30)
第13回 魚のすみやすい 川づくり勉強会 [要申込・ 対面は要資料代] [定員]対面:50人 WEB:100人	11月20日(月) 13:30~16:45	●新潟県魚沼市 小出ボランティア センター ●WEB配信	この夏の高温・湯水が河川環境に与 えた影響についての報告。また「魚の すみやすい川とは」について考える。 【申込】 [WEB]専用サイト →  [対面]右記メール・FAX 【締切】11月10日(金)	勉強会事務局 (エヌシーイー(株) 長岡事業所内) TEL:0258-94-5851 FAX:0258-94-5852 メール: Y-Ogawa@nceinc.co.jp
地域の明日を 考える講演会 [要申込・無料] [定員]100人	11月30日(木) 午後	新潟市 アートホテル新潟駅前	2024年は中越地震から20年目を迎える。 震災からの20年を振り返り、震災 を経験した中山間地域のこれから を考える。 中越地震から20年を振り返る(仮題) 【講師】室崎 益輝 氏 (神戸大学名誉教授) 【申込】 詳細が決まり次第、協会HPに掲載	北陸地域づくり協会 企画事業部 TEL:025-381-1160

新型コロナウイルス感染状況等にもない、実施内容が変更される場合があります。事前にお確かめの上、お出かけください。

編集後記

記録的に暑く長かった夏が終わり、ようやく秋の気配が感じられるようになった。

今号では、いろいろな「まちづくり」について紹介した。

住民が主体となった災害からの復興まちづくり/砂防事業と観光振興を組み合わせさせたツアー/空き家を活かした店舗を順次オープンさせた「歩きたくなる温泉街」づくり/焙煎の香り漂うまちへ人々を誘い茶道文化を伝える独自の工夫/など、昔からのまちづくりを継続しつつ、今の視点で新たなことにチャレンジしている。

田口先生が、まちづくりには「人材の持続性」が重要だと説いている。それぞれの地域に残る魅力を活かし、防災やまちづくりを学ぶことが、未来に繋ぐ子どもたちの増えるきっかけにもなれば良いと改めて感じた。

(事務局)

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

(一社)北陸地域づくり協会は持続可能な
開発目標(SDGs)を支援しています

地域づくり in ほくりく 第32号

発行 令和5年10月2日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP : <https://www4.hokurikutei.or.jp>